時間意識の現象学と時間の形而上学

――現象学的時間論における通時的同一性の問題――

齋藤　暢人

０．はじめに

「通時的同一性」は逆説的な概念である。われわれは、例えばメロディのような対象を通時的に同一なものとして措定しており、その限りで、通時的同一性は自明視されている。しかし本当にこれは自明なことなのだろうか。同一者不可識別の原理 $x=y \rightarrow \forall\phi\,(\phi x \rightarrow \phi y)$について考えてみよう。いま、時点 t_1 が時点 t_2 に先行するとせよ。また、t_1 においてＣ音を聴き、t_2 においてＤ音を聴きながら、それでも**同じメロディ**を聴いているとせよ。すると、メロディ@ t_1 = Ｃ音であり、かつメロディ@ t_2 = Ｄ音である。ところが、メロディ@ t_1 = メロディ @ t_2（通時的同一性より）。するとＣ音 = Ｄ音。だが明らかにＣ音 ≠ Ｄ音（矛盾）。このパラドクスが意味するところは様々であろう。しかし、少なくともわれわれは、通時的同一性が形而上学の躓きの石になりうることを認めるべきではないだろうか。本稿では、このような帰結を踏まえた上で、フッサールが残した内的時間意識の現象学的分析、その形而上学的帰結の一端を明らかにしてみたい。

１．実体と出来事

われわれにとっての実在は、それぞれの時間性格に関して対照的な二つのグループに分類できる。実体 substances と出来事 events である。その存在性格が必ずしも時間的限定を必要としないものが実体であり、存在するために時間的延長を本質的に要求し、それゆえ時間的限定を本質的とするものが出来事である。両者の実在性は直観的には疑いえない。しかし究極の実在性をどちらに認めるべきかとなると議論は錯綜してくる。論点は、（Ｄ・ルイスによる）対象の持続 persistence はその時間的部分であるという説、および（マクタガートによる）時制は実在に本質的であるという説、以上二点にほぼ集約される[1]。

まず、存在者の持続をその時間的部分 temporal parts に注目して考えてみよう。すると、実在は時間的部分をもたず、その全体が現在において存在するという「全体主義 endurantism」と、実在は時間的部分をもち、その一部だけが現在において存在するという「部分主義 perdurantism」の、少なくとも二つの立場がありうる。

さらに、時間性格を考えるためには時制 tense の相違は無視できない。つまり、

---

[1] 一時的内在性質 temporary intrinsics に関するルイスの説は、通時的同一者は相反する性質をもちえないという主張を骨子とする。ここからルイスは、相反する性質の担い手は対象全体ではなく、たかだかその時間的部分にすぎないとし、対象の通時的同一性を否定する（この主張は様相の形而上学における間世界的同一性の拒否および対応物 counter part 理論と並行である）。マクタガートの古典的理論は時間の実在性を否定する。それによれば、時制は時間にとって本質的であるが時制システムは矛盾しており、よって時間それ自体が実在性を欠く：cf. LOWE [1998], Ch.4, SIDER [2001], Ch.3, §4

現在は実在的だが過去や未来は実在性を欠き、したがって実在にとって時制の相違は本質的であるという「現在主義 presentism」と、時制による実在性の差異は一切なく、過去や未来にも完全に現在と同等か、少なくとも虚構以上の実在性が認められるという「永遠主義 eternalism」の、二つの立場があり得る。

ここで、全体主義と現在主義、部分主義と永遠主義とはそれぞれ同値にみえる。これらを組み合わせるならば、可能なのは全体主義かつ現在主義と、部分主義かつ永遠主義だけであり、前者が「実体存在論」であり、後者が「出来事存在論」ではないだろうか。

結論を急がずに検討してみよう。現在主義によれば、実在とは現在存在するもののことである。過去はすでに消滅してしまったもの、未来はやがて生成しようとしているものであって、いずれも実在性を欠く。他方で、全体主義は時間的部分を認めないが、これはつまるところ、現在という瞬間のみに実在性を帰することではないか。すると両者は同一視できないだろうか。だが、変化を考慮にいれると事態は微妙になる。時間的部分を認めない全体主義は永遠主義と両立可能だろうか。この場合、実在は過現未にわたって同一であるにもかかわらず変化を許容することになる。このような実在は、一時的部分 temporary parts と時間的部分とを峻別し、同一の実在が変化しうるのはその一時的部分が交替しうる、とすることによってイメージできるであろう[2]。時間的部分は時間的概念を含むが、一時的部分はそのようなものを含まない。それは、それ自体は非時間的でありながら何らかの時間的な関係によって全体を構成する。一時的部分のなかに交替しない本質的な部分があるとき、実在は通時的に同一であろう。よって、**全体主義と現在主義は端的に同値ではない。**他方で、部分主義と現在主義は両立しないように思われる：現在存在するものが実在の時間的部分でしかなく、いささかも過去や未来に跨って存在しないとすれば、それら一切を含むはずの全体は一体どこにあるのだろうか。よって、**部分主義は現在主義の否定を帰結するので、永遠主義を含意することになる。**結局、１．全体主義かつ現在主義、２．全体主義かつ永遠主義、３．部分主義かつ永遠主義、という、全部で三つの立場が区別できる[3]。しかし実は、全体主義における実在は実体である。現在主義では時間的延長がそもそも認められないし、永遠主義において時間的部分のようにみえるものは、非時間的な諸部分、諸構成要素が時間的に分配された姿に過ぎないからである。他方、部分主義では、時間的部分をもつ存在者の第一候補は出来事であり、出来事存在論が含意されるであろう。したがって、三つの立場はそれぞれ異なるが、ここでは、現在主義と永遠主義との相違を捨象し、全体主義から実体存在論、部分主義から出来事存在論が帰結すると考えてよい。

しかし、変化そのものを考慮に入れると、現在主義と永遠主義との相違はやはり重要である。伝統的な観点も考慮するならば、変化は「相変化 phase change」と「生成消滅 generation and corruption」の少なくとも二種類に分類できる。前者は、同一の実在が存在しつづけながら、その部分や性質・関係において蒙る変化であり、

---

[2] この戦略自体は一般的である。Cf. SIMONS [1987], Ch.5, CASATI & VARZI [1999], Ch.10

[3] 部分主義かつ現在主義の可能性については：SIDER [2001], Ch.3, §4

後者は、実在がそもそも存在するようになったり、存在しなくなったりする変化である（後者はいわゆる実体的変化 substantial change である。ここでは融合分裂 fusion and fission などは考えず、アリストテレス・トマス的伝統に従う）[4]。先の三つの立場は、これらの違いをどのように説明するのだろうか。まず１の場合、実在は瞬間的であるから変化もまた各瞬間において生じる。したがって、それは生成消滅でしかありえず、相変化は認められない。２の場合、当の実在が持続する限り相変化は認められるが、生成消滅の説明は困難である。実在の一時的部分は非時間的であり、それらは実在との時間的関係によって限定される。だがそうであるならば、当の実在が存在するようになったり、しなくなったりする生成消滅はどのように考えればよいのだろうか。そのとき実在はいまだに存在しないか、あるいはもはや存在しないのである。それでも何かが存在するとすれば、明らかに実在は生成消滅しないのではないか。では３はどうだろうか。このとき各出来事はもちろん生成消滅する。では、相変化はどうか。もしそれらが一定の幅をもたねばならないという要請が不可能ならば、１の場合と同様、たしかに相変化は生じえないことになろう。しかし３においては現在主義が否定されるので、この要請は可能である。したがって、同一的な出来事の生成消滅の途上での変化、つまり相変化は可能である。したがって、実体存在論では相変化か生成消滅のいずれかが成り立たないが、出来事存在論ではいずれの変化も許容される。さらに、部分主義と出来事存在論は同値であろう。注意すべきは、**部分主義が通時的同一性の否定を含意する**ことである。このとき通時的に同一にみえるものは、実はさまざまな時間的部分の集積に過ぎない[5]。そのような集積をひとつの「個体」とみなそうとしたところで、当の「個体」は始点と終点とで別物になっているのである。

２．時間意識の現象学

フッサールの時間論は、知覚に代表される志向的体験一般の構造についての分析、再想起の機構の分析、あるいは時間意識そのものの分析といった、多様な文脈に登場する。しかしながらその所説を検討する限り、彼が通時的同一性を認めることは明らかにみえる(ZB, No. 39)。たとえば、同一性意識を目的とする意味志向の充実には、静態的な要因ばかりでなく動態的な要因が介在するが、「…同一性が…反省によってはじめてもちこまれるのではなく、はじめからそこにあること…は明らかである…」(6LU§8, p.34)。また、「すべての今は、過去へ沈降するときにも、それ自体の厳密な同一性を維持しており、これは普遍的・根本的事実である。…このような変転にもかかわらず、それ自体変様する意識はそれ自体の対象的志向を維持している（しかもこれは時間意識の本質に属する）」のである(ZB§30)。これらに類するものを現象学の基本的主張とみなすことは、フッサールのテキストに親しんだ者の眼には奇異には映らないであろう。そのような深い意味においてならば、現象学とは、多様な現出を貫く同一者の研究であると言うことさえできるであろう。

---

[4] Cf. KÜNNE [1983], Ch.2, §4, LOWE [1998], Ch.8
[5] LOUX [1998], Ch.6

しかし、フッサールは実体の措定を回避しようとしている。『論理学研究』第三研究における契機 Moment の存在論はその恰好の事例である。「プレグナンツとしての全体」は、断片や契機などの諸部分がとくに緊密に結合した複合体である。一般に、実体を立てない存在論は、それに相補的な出来事に依拠する存在論でありうる。もちろん契機は、なによりもまず色や音といった抽象的性質であるから、契機の存在論から出来事存在論が直ちに帰結するわけではない。しかし、フッサール存在論の出来事存在論的性格を窺わせる根拠は存在する。

①出来事（時間的延長を本質的に要求するもの）を実在と認める。フッサールの契機の例は：鳥が飛ぶことや犬が吠えること(1LU§23)、歌手の歌(5LU§11)、ヴァイオリンのアダージョや鳥の旋回(5LU§14)、オルガンの音色(6LU, App.4)、などであり、いずれも出来事である。したがって、出来事は契機の一種と言ってよいだろう[6]。また、時間意識の分析の典型的な対象は音であるが、時間的展開のない音はありえないので、これも典型的な出来事である。また、フッサールは、超越的対象や内在的対象の現出というプロセスと、意識の時間的構造それ自体が生成するプロセスを根本的に区別している。後者は対象の構成ではなく、むしろその可能性の条件である（彼はこれを「現出」と呼ぶことを拒み、「自己構成する現象 die sich konstituierende Phänomen」と呼ぶ）(ZB§10)。この結論に呼応して、フッサールは、個体としての客観もまた、本来はプロセス Vorgang であると考えるようになったと思われる。というのも、それが究極的に拠りどころとする自己構成する現象は、そのなかに持続が認められないプロセスだからである(ZB§35)。これは、速めたり遅くしたりできないという意味で絶対的なプロセスであり、比較を可能にする持続するもの、つまり実体を要求しない(ibid.)。これが実在性の根拠であるならば、実在は究極的には出来事であると考えてよいだろう。

また、自己構成する現象に時制を付与することはできないが、時間的前後関係は認められる(ZB§36)。これは現在主義と全体主義の拒否である。したがって、永遠主義かつ部分主義であるから、妥当な存在論は出来事存在論でなければならない。

②実在には相変化と生成消滅が共に可能、よってこれは出来事である。出来事だけが相変化と生成消滅の両者を許容する。よって、フッサールが双方を認めるならば、彼の考える実在は出来事であることになる(Cf. EU§§40, 42, App. I)。

相変化については、たとえば次に注意すべきであろう。フッサールは、対象の持続が経過する様相と、その時点が経過する様相とを区別し、そのうえで、持続が時点を「位相 Phase」（＝対象の時間切片）としてもつと主張する(ibid.)。これは、持続するものが次々に性質を取り替えるという、相変化が一般的に連想させるイメージに合致している。個体の変化について彼が指摘するのは、持続するものは同一であること、持続するものの変化はその質に関する変化ないし不変化であることである。前者は、「時間位置 Zeitstelle」（＝時点）が対象の個体的同一性を定めるということの帰結であるが(ZB§§30, 31)、それに対して後者は、質的変化と無関係に時間が推移することを帰結する(ZB§40)。

---

[6] Cf. MULLIGAN [1995], pp.173-180

生成消滅は相変化ほど詳細には論じられていないが（おそらく持続の連続性が重視されていたから）、たとえば、印象は「持続する客観の産出が始まる源泉点」である(ZB§11)。フッサールは印象ないしそれに相当する与件の登場に先行する機構については考えないので、これが「本来的な意味での産出」であれば(ZB, App. I)、同時にいわゆる「生成」でもあろう。また、持続は「やがて消失する」(ZB§11)。つまり、過去把持には終わりがある。生成の場合と同様、彼は知覚できなくなった与件が辿る運命については沈黙しているが、それはこれが「消滅」したと解されることを妨げない[7]。

また、彼が「時間野 Zeitfeld」と呼ぶ時間意識の単位の幅は有限であり、それが無限に長い場合は想定可能であるが、それは飽くまで理念的な操作である(ibid, n.1)。さらに、一般に、現象学的与件は多数与えられており、例えば色と音のように、それぞれの本質に関して異なりながらも、「いまある」という意識性格を共有し、同時的な現在の知覚を形成している(ZB, App. VII)。これを一定のスパンにおいてみるとき、すべての内容が一斉に生成し、一斉に消滅するわけではない。「多数の原感覚の系列が終始している」のであるから(ZB§38)、体験流からある「時間野」（＝時間間隔）をとるならば、そのなかには終始持続している与件に並んで、幾つかの与件が生成消滅していることが看取されるはずである[8]。したがって、彼が実在に相変化と生成消滅の双方を要求すること、それゆえ、その実在が実体ではなく出来事であることは明らかであろう。

③時間規定をもたない内容を認めない。つまり、実在にとって時間規定は本質的である（時間的延長を要求するという限定はむしろここから帰結する）。するとこのとき、この主張は、いわゆる「『統握・統握内容』図式の解体」として知られている、フッサールの思想的立場の変遷からの帰結とみることができる。この問題は、具体的には、意識による時間規定を「統握・統握内容」図式によって説明しようとするとパラドクスを生じるということである。その帰結が③に他ならない。

この③を厳密に導出してみよう[9]。フッサールの時間意識の分析からは二つのパラドクスが生じる。ひとつは時間規定の両立不可能性に関するもの、もうひとつは無限後退である。正確な論証のため、以下では次のような記号を用いる。変項 c は任意の存在者ではなく内在的な体験内容を表す。これは構文論的には文的に振舞う（これは抽象的対象としての命題ではない）。「Wc」は「内容 c に基づいて知覚する」、「Jc」は「内容 c の時間規定は今である」、「Ec」は「内容 c に基づいて想起する」、「Vc」は「内容 c の時間規定は過去である」ということである。

---

7 発生的現象学的観点からは、意識内容の生成消滅をさらに詳細に分析できるかもしれない。顕在的意識においては生成消滅したかにみえるが潜在的意識において命脈を保っている内容の記述可能性は否定できない。しかし、そうした内容のすべてを、意識流全体にわたって存立するある種の普遍者と考える必要はないであろう。

8 フッサールは以下のように主張している。個体は時間的延長をもち、生成においてのみ存在する(EU§43b), pp.217-8, §64a), p.304)。また、意識においては常に生成としての現在の連続的な出現と経過がみられ、持続の本質をなしている(EU, App. I., BM, No.16)。

9 Cf. BROUGH [1972]

これら心的態度、時間に関する規定は、文的な内容に対して副詞的に作用する。

第一のパラドクスを示そう。ここで$\forall c\ (Wc \rightarrow Jc)$、$\forall c\ (Ec \rightarrow Vc)$、$\forall c\ \neg(Jc \wedge Vc)$という前提を認める。つまり、知覚内容は「いま」存在し、想起の内容は「かつて」存在し、「いま」と「かつて」は両立しない、とする。他方でWc^*、Ec^{**}、$c^*=c^{**}$と仮定する。すると$Wc^* \rightarrow Jc^*$、$Ec^{**} \rightarrow Vc^{**}$。よって$Jc^*$、$Vc^{**}$。よって$Vc^*$。よって$Jc^* \wedge Vc^*$。他方で$\neg(Jc^* \wedge Vc^*)$。よって矛盾する。ここで仮定 $c^*=c^{**}$は内容の時間的普遍性を表している。フッサールによれば、内容は時間規定をもたない。つまり、質的に同一な内容は数的に同一である。

第二のパラドクスを示そう。$\forall c\ (Wc \rightarrow JWc)$、$\forall c\ (Jc \rightarrow Wc)$という前提をおく。$Wc^*$と仮定する。ここで$Wc^* \rightarrow JWc^*$。よって$JWc^*$。ここで$JWc^* \rightarrow WWc^*$。よって$WWc^*$。ここで$WWc^* \rightarrow JWWc^*$。よって$JWWc^*$。ここで$JWWc^* \rightarrow WWWc^*$。よって$WWWc^*$。以下同様にして、ある知覚体験の措定が、無数に多くの知覚体験の措定を帰結することが示される。知識様相や信念様相にとってこの種の無限後退は無害かもしれないが、知覚様相にとってはそうではないであろう。少なくともこの結果は、フッサールの分析が不適切であることを示唆する。

$\forall c\ (JWc \rightarrow Wc)$、つまり、前提$\forall c\ (Wc \rightarrow JWc)$の逆をおくと、この無限後退を回避できないだろうか。Wc^*と仮定する。すると$Wc^* \rightarrow JWc^*$であったからJWc^*。ここで$JWc^* \rightarrow Wc^*$。よって Wc^*。たしかに先のパラドクスは生じない。ところがこれは、先の前提と併せると$\forall c\ (Wc \leftrightarrow JWc)$である。これは、直観的には「いま」という時間規定を離れて知覚体験の内容が自存するということを意味する。ここでの「J」は単なる修飾にすぎず、どのような規定も内容と統握の複合体として分析されるべきであるという「統握・統握内容」図式の要求をみたさない。したがってこの前提に訴えることはできず、パラドクスは回避できない。よって、内容は初めから時間規定をもっていることになり、かくしてわれわれは、実在が時間的部分をもつという結論に至ったことになる。

以上が、フッサールが出来事存在論にコミットしていることを示す根拠である。①より、フッサールが出来事を実在として認め、②より、フッサールが認める実在はいずれも出来事であることが示された（したがって、フッサールが措定する実在は出来事のみである）。さらに③より、実在が時間的部分をもつことが示され、この推定は補強された。しかし再三述べたように、出来事存在論においては通時的同一性が成立しない。すると、他方において通時的同一性を主張しているように思われるフッサールの立場は不整合なのだろうか。事物やプロセスは時間的部分をもつが、それらは、時間的部分を単に寄せ集めたものではなく、知覚の対象は通時的に同一である、という彼の主張は、むしろ出来事存在論を否定してはいないだろうか(Cf. BM, No.17)。しかし問題は通時的同一性をどのように理解するかである。それを考慮すると、われわれはこの主張から、「通時的同一性」は抽き出せても、実体存在論までは抽き出せない。通時的同一性が認められないケースにおいても、それに代わる通時的な枠組みは提供できるし、そもそも時間的部分を容認している点で、この主張は、もはや出来事存在論を否定しては整合的に理解できないのではないか。

３．出来事存在論と志向性

出来事存在論においても、時間的部分を包括する通時的枠組みは認められる。いわゆる「同類性 genidentity」である。比較的大きな出来事 A の各部分をなす出来事

B, C, D,…は、それぞれが「他の部分 X と共に当の A を構成する」という同値関係をみたしている。ここで、各部分の和 B+C+D+…が他ならぬ A であるから、A を構成することは通時的な枠組みになっている。しかしここから通時的同一性は帰結しない。よって、出来事存在論においては、通時的同一性は認められない。したがって、フッサールの存在論が出来事存在論であるなら、そこでもまた通時的同一性は認められないのである。

ところで、意識にとって、それが変化を貫いて通時的に同一のものについてのものであるということが本質的であるならば、相変化と生成消滅という現象は両立不可能に思われる。以下これを示そう。

相変化の例として推移 transition を採ることにしよう。まず一方で、推移を意識するとき、通時的同一性はもちろん保たれている。同一の対象が意識されて意識は統一をなし、志向的体験の個体性が確立されるからである。だが、このような意識にとって生成消滅は関心の外にあり、意識されないであろう。

フッサールは「変化の知覚と知覚の変化の同時性」を主張する(ZB, App. V)。推移が意識されるのは、対象の相変化が意識されるときであるが、このとき知覚は対象の変化と並行的である。たしかに事物のような超越的対象については問題が残るが、感覚与件のような内在的対象の場合、変化の知覚と知覚の変化を区別する必要はない。であるならば、相変化は明らかに生成消滅を排除するように思われる。

では生成消滅はどうか。このときも通時的同一性は保たれる。過去の意識自体が消滅し、新たな意識へと移行するからである。意識はいわば「跳躍」を経験することになるが、その一瞬は時間的部分をもたず、そこにはいかなる出来事もない。したがって通時的同一性が破られるべき出来事も存在せず、通時的同一性はトリヴィアルに成り立つ。だが推移は存在しない。推移すべきものが存在しないからである。

フッサールは、生成消滅について次のように述べている。意識における生成は、「新しい今」として他のものを過去へと押し退け、消滅させる印象である。意識における消滅もまた「過去への沈降」として他のものにその場を譲り渡し、その当のものを生成させる過去把持的変様である(EU, App. I)。つまり、意識における生成消滅は表裏一体の関係にあり、その知覚は、比較的長い知覚に組み込まれたきわめて短い部分知覚、あるいは位相だが、それでも独立している。このような印象と過去把持の独特の結合体は歴とした知覚であり、個々の印象や過去把持とは根本的に異なっている。にもかかわらず、このような「転機」の意識は瞬間的な位相であり、そこに推移はみられない。フッサールは、一様に鳴り続ける C 音を聴くといった、意識の均質な時間的経過を想定する思考実験を行う(ZB§§31, 41)。これによれば、等質な印象の連続的生成においても、最初の与件は絶えず変様されねばならない(ZB§41)。それゆえ推移は生成に還元されない。また、消滅したものは過去への沈降というシステムから脱落しており、もはやそこに内在的時間性としての推移を見出すことはできない(ZB§44)。したがって、生成消滅は推移と両立不可能である。

しかし、他方で、フッサールは、時間意識が「二重の志向性 zweifältige Intentionalität」という構造をもつ、という(ZB§39, App. VIII)。彼はこれによって意識における通時的同一性を説明しようとしているように思われる。彼によれば、

記憶の本質として重要なのは、第一に、過去把持と再想起の二種類があること(ZB§19)、第二に、過去把持がさらに、同時的な今の状態に先行する直前の状態である「先同時性 Vor-Zugleich」を構成する「縦の志向性 Längsintentionalität」と、統一体としての時間客観を構成する「横の志向性 Querintentionalität」との、不可分な統一体であること(ZB§§38, 39)、である。過去把持は直近の過去を表象するが、再想起は相対的に遠い過去を表象する。また、過去把持の明証性は知覚的であるが、再想起のそれはむしろ想像的である(ZB§23, App. III)。それゆえ、意識の連続性は他ならぬ過去把持が保証する。同一性意識は対象の諸位相の質的同一性によって成立するが、過去把持は、質的同一性を支える合致 Deckung の必要条件である。過去把持が直近の過去を表象するにすぎないのであれば、それは合致の十分条件ではない。現在の意識と過去の意識の質的同一性は保証されないからである。したがって、過去把持は直近の過去と質的に同一の対象を表象しうる。たしかに、同一性意識一般が連続的ならば再想起すら連続的ということになり、不合理である(ZB§32)。しかし、過去把持はいわば過去の直接知覚であり、こうした特異な性質をもっているのである。この過去把持の特異性は、縦の志向性と横の志向性からなる二重の志向性に由来すると考えてもよいかもしれない。縦の志向性は今の位相と過去の位相の連続性を示すが、それはあくまでも限界としての今においてである。そのような今にも、過去把持、過去把持の過去把持…という時間的な遠近の入れ子構造が縦の志向性によって保証される。しかし、この入れ子構造が位相以上のものにはなることはない。時間意識にはこれらの継起が必要である。今の意識は、それによってはじめてそれ自体を超越し、時間的限定が異なる過去に関係づけられる。それを保証するのが、対象の同一性を確立する横の志向性である。したがって、縦の志向性においては、今の位相という限界における存在、つまり生成消滅が、横の志向性においては、各位相間での存在、つまり推移が生じている。これを時間意識の基本構造とみなすならば、時間意識はこれらが二重に絡み合ったものとして記述できるであろう。

しかしながら、この説明は次のような意味においてミスリーディングである。

ここで志向性についての一般的テーゼを想起するならば、意識が二重の志向性をもつということは原理的にありえない。ここでブレンターノ、トワルドフスキらが提示した志向性理論に拭い難く付き纏う困難を想起すべきである。フッサールが理解した限り、この理論では知覚が説明不可能である。ブレンターノ説では知覚の対象は感覚与件であり、事物は知覚されない。そこでトワルドフスキは対象と内容の区別を導入したが、彼の理論は一種の写像説に陥っており、知覚の場合、われわれは知覚の対象である超越的対象と同時に、その内容である内在的対象をも志向していることになる。いまはこうしたフッサールの理解の妥当性を敢えて検証しないが、「一般にわれわれが志向する対象はそのつど一意的に確定される」という主張がこのような帰結を斥けるための要請だったことは明らかであろう。

したがって、この前提を置くかぎり、二重の志向性というこの概念装置もまた、単一の意識体験に内在する二重の志向性というように理解されるべきではない。それはあくまで異なる志向性であり、両者がたとえどれほど緊密に関係していたとしても、それぞれは異なる体験に帰属するものでなければならない。であるならば、

生成消滅をもたらす縦の志向性と、推移をもたらす横の志向性とが個体的な体験において両立しない以上、生成消滅と推移という現象そのものもまた、同時に意識されるということはありえないはずなのである。

４．通時的同一性とはなにか

かくして、意識においてはどちらか一方の変化のみが可能である。意識が通時的に同一の対象を措定することはこの特性に由来するのではないか、とさえ思われる。だが、ここでそもそもの問題に立ち返る必要がある。果たしてこれは、フッサールが実体存在論を採ったことを意味するのであろうか。

通時的同一性は多様な与件の統一のために必要とされたので、現出の規定にすぎない。つまり、ここでの同一者を実体と解する必要はない。現象学的な同一者は何よりも志向的対象であり、実体とは限らないのである。ここでは、知覚における超越的対象が還元・排除された内在的知覚においても同一者が与えられることに注意すべきである。還元によって取り出される内在的所与性にも「先経験的・先現象的 präempirisch-vorphänomenal」だが同一的な「実体 Substanz」がある。また、この実体の「付帯性 Accidenz」である非独立的契機も同一者として現われる(ZB, App. XI)。このように、外部知覚と内部知覚は構造的に並行であり、同一者の措定に関して両者は同様である。典型的な内在的知覚である記憶の場面においてもそうである(ZB§44)。措定される同一者は、それが事物であろうと出来事であろうと、実的に内在的な者であろうと、時間的位相の多様体に対する統一体である(ZB, No.39)。つまり、統一体としての志向的対象は、「実体か出来事か」という存在論的論点からも、「超越的か内在的か」という現象学的論点からも独立である。

そのような志向的対象が実在性を欠いていることはもはや明らかであろう。こうした同一者に「実体としての振舞い」という機能は認められても、それはあくまでも意味の次元においてであり、実在性までは導けないだろう。フッサールは、対象の通時的同一性を「意味の同一性」によって説明したり(ZB§31)、連続性の意識が同一性の意識を前提することを「理念的虚構である」と注意したりする(ZB§40)。志向的対象についての一般的なテーゼをも勘案すれば、実体存在論の採用よりもむしろ通時的同一性の放棄を考えるほうが自然ではないだろうか。

するとフッサールが出来事存在論を採用したことを否定する材料はもはやないが、敢えて出来事存在論において通時的同一性を認めようとすれば、残された手段は、実在の単位となるべき出来事、原子的出来事を要請する以外にないであろう[10]。そのような出来事の内部では生成消滅は生じない。なぜなら、それが認められるとき、当の出来事の通時的同一性は成り立たなくなり、したがってこれを複合的な出来事とみなさざるを得なくなるが、これは仮定に反するからである。よって、ここで生じ得る変化は相変化であり、典型的には推移である。そしてもちろん、このような出来事それ自体は生成消滅するので、原子的出来事としての実在は被るべき二種類の変化を兼備している、と考えられよう。

---

[10] この路線を追究した実例はＡ．Ｎ．ホワイトヘッドのプロセス形而上学であろう。

しかしこのような形而上学的主張は、内在的観点にとどまる限り不可能であろう。意識においては推移と生成消滅のいずれか一方のみが可能なのであり、双方が可能なものはもはや意識現象ではない。いわば、真実在を捉えようとした途端、意識は自己構成する自己の本質を見失うのであり、自らが求める通時的同一性は決して充たされないのである。

５．結論

結論は次の通りである。すなわち、フッサールは出来事存在論者であり、通時的同一性を否定した。他方で、彼が分析の出発点に選んだのは意識である。そこでは対象が通時的に同一なものとして現われるので、あたかも実体が実在するかのように思われる。しかし、この（機能としての）実体がいかなる実在性をも欠いていることは、それが相変化と生成消滅という基本的な変化のパターンを兼備しないことから明らかである。したがって実在とは出来事であり、実体存在論は出来事の世界に意識が投影した仮象にすぎない。

付言すれば、いわゆる意識のパースペクティヴ性はこの結論を支持するように思われる。現在という性格をもつ知覚にとってその主体のパースペクティヴは本質的であるが、他方、記憶にはそれほどまでに強固な主体を要求する機構は見出せない。むしろ、記憶主体の現在と過去には修復し難い亀裂が走っているようにみえる（自我分裂 Ichspaltung！）。一般に、意識の多様なパースペクティヴが統一的な意識流となるのは、むしろこの記憶の本性によるのではないだろうか。すると、意識のこうした性格に相応しい存在論は、出来事存在論なのではないだろうか。

最後に、本稿の議論が、フッサールの内的知覚、あるいは反省から出発していることに注意したい。すると、本稿の結論は、仮に形而上学的問題に関する先入見を捨てて内在的な立場から議論を進めても、意識の本質必然性によって形而上学的問題は不可避であることを意味するであろう。つまり、時間意識の現象学から時間の形而上学へという過程を、志向性の形而上学的本性が媒介しているのである。

文献

Brough, J. B., 1972, 'The Emergence of an Absolute Consciousness in Husserl's Early Writings on Time-Consciousness', *Man and World* 5, 298-326 : Casati, R. & A. C. Varzi, 1999, *Parts and Places: The Structures of Spatial Representation*, MIT Press : Husserl, E., 1939, *Erfahrung und Urteil*, （略号 EU）: ——, 1966, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins (1893-1917)*, Husserliana X, （略号 ZB）: ——, 1984, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, I. Teil, Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Husserliana XIX/1, 2（略号 LU）: ——, 2001, *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewußtsein (1917/18)*, Husserliana XXXIII,（略号 BM）: Loux, M. J., 1998, *Metaphysics: A contemporary Introduction*, Routledge : Lowe, E. J., 1998, *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Clarendon : Mulligan, K., 1995, 'Perception' in Smith, B. & D. W. Smith (eds.), 1995, *The Cambridge Companion to HUSSERL*, Cambridge University Press, 168-238 : Sider, T, 2001, *Four-Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*, Clarendon : Simons P. M., 1987, *Parts: A Study in Ontology*, Clarendon